大学生の全体的自己価値の検討

A study on global self-worth of university students

山本　ちか
Chika YAMAMOTO

本研究の目的は，大学生の全体的自己価値の様相を検討することである．全体的自己価値については，男子の得点が高く，女子の方が自分自身を否定的に評価している．また１年生と比較して２，３年生の方が肯定的に評価している．具体的側面の自己評価も同様で女子の方が否定的に評価している．また全体的自己価値と具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度の関連の仕方については，男女ともいずれの学年も「身体的外見の自己評価」と「知的能力の自己評価」が全体的自己価値に影響していた．その他については，学年別・性別に影響の仕方が異なっていた．

The purpose of this study was to examine the relationship between the global self-worth, domain-specific self-evaluation, and domain-specific importance for university students. The self-evaluations and importance were assessed physical appearance, athletic competence, and academic competence. The results showed the global self-worth and domain-specific self-evaluations were negative, for female. And, global self-worth was negative, for first graders. The physical appearance self-evaluation was strongly related to the global self-worth. It was suggested that the influence on global self-worth of domain-specific importance was different from domain-specific self-evaluations, by gender and grade.

キーワード：全体的自己価値，具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度，大学生
global self-worth, domain-specific self-evaluation, domain-specific importance, university students

【目的】

全体的自己価値とは，自分自身についての評価的感情であり，例えば自分のことが好きであるのか，自分に満足しているのかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのか，それとも否定的に評価しているのかの程度を示すものである．

従来青年期は緊張と葛藤に満ち，ストレスの多い時期であると考えられてきた．自分自身全体に対する評価である自尊感情や全体的自己価値についても，青年期は自尊感情や全体的自己価値が著しく低下する時期であると言われてきた．しかし，近年の研究をみてみると，初期青年期に相当する中学生は全体的自己価値の動揺が起こり自己価値は低下するが，青年中期，後期には若干高まると考えられている（Harter, 1990[1]; O'Malley and Bachman, 1983[2]; Rosenberg, 1986[3] など）．

Yamamoto，Ujiie, Ninomiya, Igarashi & Inoue（2006）[4] は，初期青年期に相当する中学生の全体的自己価値の縦断的変化について検討している．その結果，全体的自己価値は，男子よりも女子の方が否定的に評価し，１年生より３年生の方が否定的に評価する傾向がみられている．また，山本（2009）[5] では，高校生の全体的自己価値の性差・学年差を検討している．その

結果，青年中期にあたる高校生についても男子より女子の方が自分自身を否定的に評価しており，１年生と２年生では評価の仕方に差はみられていない．

本研究では，青年期後期にあたる大学生が，中学生・高校生と同様に自分自身について否定的に評価しているのか，それとも青年後期になると比較的肯定的に評価しているのかを検討する．

またこうした自分自身を否定的に評価する傾向にどのような要因が影響しているのだろうか．Harter(1988)[6] は，中学生・高校生を対象として，「学力コンピテンス Scholastic Competence」「社会的受容 Social Acceptance」「運動能力 Athletic Competence」「身体的外見 Physical Appearance」「仕事コンピテンス Job Competence」「恋愛関係 Romantic Relationships」「道徳的行為 Moral Conduct」「親友 Close Friendships」の８つの具体的側面の自己評価を捉えている．そして青年にとって，全体的自己価値に最も影響している側面は，「身体的外見についての自己評価」であり，逆に全体的自己価値にあまり影響しないのは，「学力」，「運動能力」についての自己評価であると述べている（Harter, 1999[7]）．DuBois, Felner, Brand, Phillips, & Lease (1996)[8] は，５つの具体的な領域（仲間関係，学校，家族，身体的外見，スポーツ）の自己評価が，全体的自尊感情へ影響し，最も影響するのは，身体的外見であることを指摘している．

本研究についても，自分自身全体についての評価である全体的自己価値とは別に，身体的外見や知的能力など自分自身のより具体的な側面についての評価についてもとりあげ，大学生にとって全体的自己価値にはどのような側面の自己評価が関連しているかを検討する．具体的な側面としては，大学生にとって重要であると思われる「外見」の自己評価，「スポーツ能力」の自己評価，「知的能力」の自己評価をとりあげる．

一方で，具体的側面の自己評価だけではなく，具体的側面について自分がどれだけ重要だと思っているか（例えば，外見をどれだけ重要だと思っているか）についても，自分自身全体に対する自己評価である全体的自己価値に関連するのではないだろうか．自分が重要であると感じている側面で，自己評価が高ければ全体的自己価値が高くなるが，自己評価が低ければ全体的自己価値は低くなる．しかし逆にあまり重要でないと感じている側面では，その側面の自己評価が低くても全体的自己価値には影響しないという可能性も考えられる．

山本・氏家・二宮・五十嵐・井上 (2007)[9] では，中学生の全体的自己価値と具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度の関連を検討している．その結果，男女とも外見を重要だと感じていることが，外見の否定的な自己評価，全体的自己価値に影響し，否定的な自己評価が否定的な全体的自己価値に影響している．スポーツ能力は，女子は重要だと感じていることは全体的自己価値に関連していないが，男子は重要であると感じていることが否定的な全体的自己価値と関連している．知的能力については，女子は知的能力を重要視していることが肯定的な自己評価に影響し，肯定的な全体的自己価値に影響している．一方男子については，重要であると感じていることは，自己評価にも全体的自己価値にも関連しておらず，自己評価が全体的自己価値に影響している．

山本 (2009)[5] では，青年中期にあたる高校生の全体的自己価値と具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度の関連を検討している．その結果，全体的自己価値と具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度の関連については，「身体的外見の自己評価」は，男女ともいずれの学年においても，全体的自己価値に最も関連していた．また女子は「知的能力の自己評価」も全体的自己価値に影響する傾向がみられている．

本研究では，大学生については，具体的側面についての自己評価が全体的自己価値に影響しているのか，それとも具体的側面を重要だと思っていることがより全体的自己価値に影響を与えているのか，重要度が自己評価に影響し全体的自己価値に影響するという間接効果がみられるのか，中学生，高校生と同様に側面によって自己評価と重要度の関連の仕方が異なるのかを検討する．

本研究の目的をまとめると以下のとおりである．

１．全体的自己価値および具体的側面の自己評価について，性別・学年別に相違がみられるかどうかを検討する．

２．全体的自己価値に影響を与えているのは，具体的側面の自己評価のどの側面であるのかを検討する．

３．具体的側面の重要度は性別・学年別に相違がみられるかどうかを検討する．

４．全体的自己価値により強く影響するのは，具体的側面の自己評価であるのか，それとも具体的側面の重要度であるのかを共分散構造分析を用いて検討する．

【方法】

1．調査内容

a. 全体的自己価値：

自分に満足しているか，自分が好きであるかなど自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定（非常にあてはまる～非常にあてはまらない）でたずねた．Harter(1988)[6] の「Manual for the Self-perception Profile for Adolescence」の中の全体的自己価値についての項目，DuBois(1996)[10] の Self-Esteem Questionnaire，Rosenberg の自尊感情尺度（日本語訳は山本・松井・山成 ,1982[11] を参考にした）を参考に5項目を作成した．これら5項目について高得点ほど肯定的に評価しているように合計得点を算出した．

b. 具体的な側面の自己評価：

身体的外見，スポーツ能力，知的能力について，どのように評価しているのかをたずねた（13項目）．項目は，全体的自己価値と同様に，Harter(1988)[6] の「Manual for the Self-perception Profile for Adolescence」の項目，DuBois(1996)[8] の Self-Esteem Questionnaire の項目を参考に作成し，6段階評定（非常にあてはまる～非常にあてはまらない）でたずねた．

「外見」は，今の自分の見た目に満足している，自分の顔が気に入っているなど外見についての評価である．「スポーツ能力」は，自分のスポーツ能力に満足しているなど自分のスポーツ能力をどのように評価しているかをたずねた．「知的能力」は，自分の勉強能力に満足しているなど頭のよさや勉強の能力をどのように評価しているかである．

c. 具体的な側面の重要度：

「外見がどうであるか」，「スポーツができるかどうか」，「頭がよいかどうか」，「頭がよいかどうか」が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定（非常に重要である～全く重要でない）でたずねた．

2．調査実施時期および調査協力者

調査は，愛知県内の4校の私立大学の学生に依頼した．調査は2006年12月に授業担当教員より講義中に配付し実施した．調査は強制ではないこと，記入したくなければ記入しなくてもよいことを調査用紙に明記した．

今回の分析は，4年生は少数であったため分析対象から除いた．1～3年生の中で，すべての項目に回答のあった887名（1年男子329名，1年女子195名，2年男子82名，2年女子54名，3年男子91名，3年女子126名）について分析を行った．

【結果および考察】

1．全体的自己価値および具体的側面の自己評価についての平均値，標準偏差および分散分析の結果

a. 全体的自己価値　全体的自己価値の各項目について学年別性別に，平均値（SD）を算出し，学年（3）×性別（2）の分散分析を行った（Table1）．その結果,「今の自分自身に満足している」では，男子の得点が高く（F=4.11，p<.05），「時々自分のことがいやになる（F=16.06，p<.001）」と「私はもっと自分に自信がもてたらいいなあと思う（F=10.95，p<.01）」といった項目は男子より女子の得点が高かった．また「今の自分自身に満足している」「今の自分が好きである」については，学年差と交互作用がみられた．いずれも単純主効果の検定を行った結果,「今の自分自身に満足している」は，男子では1，3年生と2年生の間に差がみられたが（F=5.50，p<.05），女子では学年差はみられなかった．また2年生のみ男女差がみられた（F=8.41，p<.01）．「今の自分が好きである」は，男子では1年生と2年生の間に差がみられたが（F=3.79，p<.05），女子では1年生と3年生の間に差がみられた（F=4.88，p<.01）．また1，2年生では男女差がみられたが（F=4.07，p<.05, F=5.54，p<.05），

Table1　全体的自己価値の項目ごとの平均値，標準偏差

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		3年男子		3年女子	
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)
今の自分自身に満足している	2.85	(1.24)	2.70	(1.15)	3.34	(1.29)	2.75	(1.21)	2.87	(1.25)	3.02	(1.23)
今の自分が好きである	3.18	(1.25)	2.95	(1.22)	3.57	(1.22)	3.09	(1.22)	3.14	(1.06)	3.39	(1.25)
時々自分のことがいやになる	4.14	(1.34)	4.34	(1.21)	3.70	(1.33)	4.34	(1.13)	3.90	(1.44)	4.25	(1.17)
時々自分がだめな人間だと思う	4.13	(1.26)	4.15	(1.18)	4.20	(1.18)	4.03	(1.23)	3.92	(1.39)	4.04	(1.29)
私はもっと自分に自信がもてたらいいなあと思う	4.55	(1.22)	4.87	(0.99)	4.29	(1.51)	4.70	(1.15)	4.49	(1.28)	4.70	(1.18)

3年生ではみられなかった．

次に，得点が高いほど肯定的に評価しているよう５項目の合計点を算出した．そして学年別性別に，平均値（SD）を算出し，学年（3）×性別（2）の分散分析を行なった（Table2）．その結果，性差がみられ（F=8.43, p<.01），学年差や交互作用はみられなかった．

b. 具体的側面の自己評価　外見とスポーツ能力，知的能力の３つの具体的側面の自己評価について，得点が高いほど肯定的に評価しているよう合計点を算出した．そして学年別性別に，平均値（SD）を算出し，学年（3）×性別（2）の分散分析を行なった（Table2）．

その結果，「全体的自己価値」については，性差がみられ（F=8.43, p<.01），学年差や交互作用はみられなかった．

「外見」については，性差がみられ（F=36.98, p<.001），学年差（F=13.60, p<.001）や交互作用（F=4.10, p<.05）もみられた．単純主効果の検定の結果，１年生（F=59.13, p<.001）と２年生（F=11.50, p<.01）では男女差がみられたが，３年生ではみられなかった．男子では男女差はみられず，女子では１年生と２，３年生の間に差がみられた（F=15.18, p<.001）．

「スポーツ能力」は傾向が異なり，性差がみられたが（F=58.54, p<.001），学年差や交互作用はみられなかった．

「知的能力」については，性差，学年差ともにみられなかった．

２．全体的自己価値と具体的側面の自己評価の関連

全体的自己価値に影響を与えているのはどの側面の自己評価なのかを検討するため，全体的自己価値を従属変数とし，外見，スポーツ能力，知的能力の自己評価を説明変数とする重回帰分析を Amos を用いて学年別・性別に行った．３つの説明変数間のすべてに共分散を仮定したモデルを検討した．モデルの適合度は，χ^2=.00，GFI=.83，CFI=1.00であった．また R^2は .11であった．

１年男子：R^2は .39であった．外見（標準化係数 =.47, p<.001）とスポーツ能力（標準化係数 =.17, p<.001），知的能力（標準化係数 =.18, p<.001）のすべての自己評価が全体的自己価値に関連していた．

１年女子：R^2は .34であった．外見の自己評価（標準化係数 =.44, p<.001）と，知的能力（標準化係数 =.20, p<.01）が全体的自己価値に関連していた．

２年男子：R^2は .43であった．1年男子同様，外見の自己評価（標準化係数 =.51, p<.001）と，スポーツ能力（標準化係数 =.19, p<.05），知的能力の自己評価（標準化係数 =.19, p<.05），全ての側面が全体的自己価値に関連していた．

２年女子：R^2は .48であった．外見の自己評価は，最も全体的自己価値に関連しており（標準化係数 =.57, p<.001），ついで知的能力の自己評価が関連していた（標準化係数 =.19, p<.05）．

３年男子：R^2は .31であった．外見の自己評価（標準化係数 =.34, p<.001）と，知的能力（標準化係数 =.31, p<.01）が全体的自己価値に関連していた．

３年女子：R^2は .31であった．外見の自己評価（標準化係数 =.34, p<.001）と，知的能力（標準化係数 =.31, p<.01）が全体的自己価値に関連していた．

１年男子と２年男子は，すべての側面が全体的自己価値と関連していた．女子については，すべての学年でスポーツ能力から全体的自己価値へのパスはみられず，スポーツ能力の自己評価は全体的自己価値に影響している．３年生は男女ともに，１，２年生と比較して知的能力の自己評価の影響が高くなっており，知的能力の自己評価が自分自身のそのものの評価に影響しているようである．

３．具体的側面の重要度の平均値，標準偏差

外見がどうであるか，スポーツができるかどうか，

Table2　全体的自己価値と具体的側面の自己評価の平均値，標準偏差

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		3年男子		3年女子	
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)
全体的自己価値	2.84	(0.95)	2.66	(0.87)	3.15	(0.93)	2.75	(0.88)	2.94	(0.93)	2.88	(0.95)
外見の自己評価	2.97	(0.90)	2.39	(0.85)	3.21	(0.79)	2.72	(0.86)	3.10	(0.85)	2.93	(0.88)
スポーツ能力の自己評価	3.48	(1.20)	2.80	(1.27)	3.54	(1.11)	2.78	(1.22)	3.59	(1.09)	2.88	(1.18)
知的能力の自己評価	2.75	(0.91)	2.59	(0.89)	2.80	(1.01)	2.70	(0.80)	2.88	(0.95)	2.84	(0.80)

頭がよいかどうかが自分にとってどれくらい重要であるのかといった重要度について，平均値，標準偏差を算出した（Table3）．男女ともどの側面についても平均値がかなり高く，重要視している様子がうかがえる．

男女や学年によって重要度に差がみられるかどうかを検討するため，学年（3）×性別（2）の分散分析を行なった．その結果，「スポーツ能力」については，男子の方が重要であると考えているようである（F=29.40，p<.001）．また知的能力の自己評価については，1年生よりも3年生の方が重要であると考えているようである（F=5.01，p<.01）．

4．全体的自己価値と具体的側面の自己評価，および具体的側面の重要度の関連

全体的自己価値に影響を与えているのは，具体的側面の自己評価であるのか，具体的側面の重要度であるのかを検討するため，共分散構造分析を行った．外見，スポーツ能力，知的能力の自己評価と，外見，スポーツ能力，知的能力についての重要度から全体的自己価値へのパス，各具体的側面の重要度から各側面の自己評価へのパスを仮定し，自己評価の側面間，重要度の側面間に共分散を仮定したモデルを検討した．

モデルの適合度は，χ^2=43.44，AGFI=.94，CFI=.99，RMSEA=.02であった．

1年男子：「外見」と「スポーツ能力」は，重要度が自己評価に影響し，それぞれの自己評価が全体的自己価値に影響していた．外見については，重要度から自己評価へのパスはマイナスであり，外見を重要であると考えているほど外見の自己評価が低くなる傾向がみられた．重要度から全体的自己価値への直接的なパスはみられなかった．「知的能力」は自己評価のみが全体的自己価値に影響していた．

1年女子：「外見」は，重要度が自己評価に影響し，自己評価が全体的自己価値に影響していた．また重要度から全体的自己価値への直接的な影響もみられた．重要度から自己評価へのパス，重要度から全体的自己価値へのパスはいずれもマイナスであり，外見を重視しているほど自分自身への評価が否定的になる傾向がみられた．「知的能力」は自己評価が全体的自己価値に影響していた．

2年男子：「外見」と「知的能力」は，自己評価のみ全体的自己価値への影響がみられた．「スポーツ能力」については，重要度が自己評価に影響し，自己評価が全体的自己価値に影響していた．重要度が自己評価に影響し，それぞれの自己評価が全体的自己価値に影響していた．また重要度から全体的自己価値への直接的な影響もみられた．スポーツ能力を重要視しているほどスポーツ能力を肯定的に評価するが，全体的自己価値は否定的に評価しているようである．

2年女子：「外見」と「知的能力」は，重要度が自己評価に影響し，それぞれの自己評価が全体的自己価値に影響していた．「外見」は重要度から自己評価へのパスはマイナスであり，外見を重要であると考えているほど外見の自己評価が低くなる傾向が見られた．一方で「知的能力」重要度から自己評価へのパスはプラスであり，知的能力を重要であると考えているほど，自身の知的能力を肯定的に捉えている傾向がみられた．「スポーツ能力」については，全体的自己価値に影響していなかった．

3年男子：「外見」は，自己評価と重要度がそれぞれ全体的自己価値に影響していた．重要度から全体的自己価値のへのパスはマイナスであり，重要であると考えているほど自分自身を否定的に評価していた．「スポーツ能力」については，重要度が全体的自己価値に直接，肯定的に影響しており，重要と考えているほど肯定的な自己評価を持っていた．「知的能力」は自己評価が全体的自己価値に影響していた．

3年女子：「外見」は，重要度が自己評価に影響し，それぞれの自己評価が全体的自己価値に影響していた．重要度から自己評価へのパスはマイナスであり，外見を重要であると考えているほど外見の自己評価が低くなる傾向がみられた．「知的能力」は，自己評価が全体的自己価値に影響していた．

Table3　具体的側面の重要度の平均値，標準偏差

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		3年男子		3年女子	
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)
容姿がどうであるか	4.44	(1.03)	4.54	(0.94)	4.24	(1.10)	4.45	(1.08)	4.48	(1.00)	4.42	(0.97)
スポーツがうまくできるかどうか	4.16	(1.18)	3.65	(1.12)	3.93	(1.21)	3.48	(1.08)	4.03	(1.09)	3.53	(1.06)
頭がよいかどうか	4.19	(1.25)	4.03	(1.06)	4.23	(1.23)	4.14	(1.13)	4.38	(1.25)	4.44	(0.93)

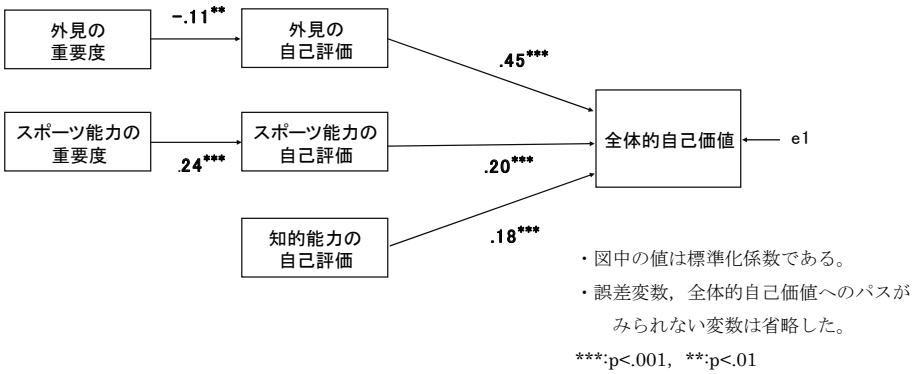


Fig.1　最終的なモデルの推定結果（1年男子）

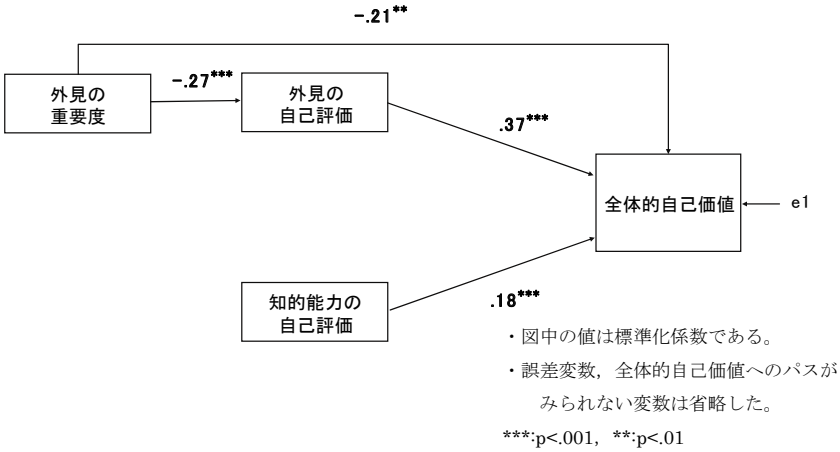


Fig.2　最終的なモデルの推定結果（1年女子）

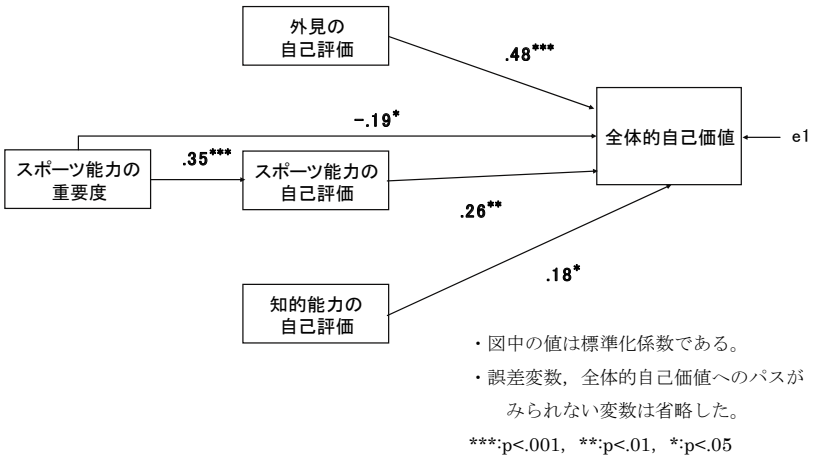
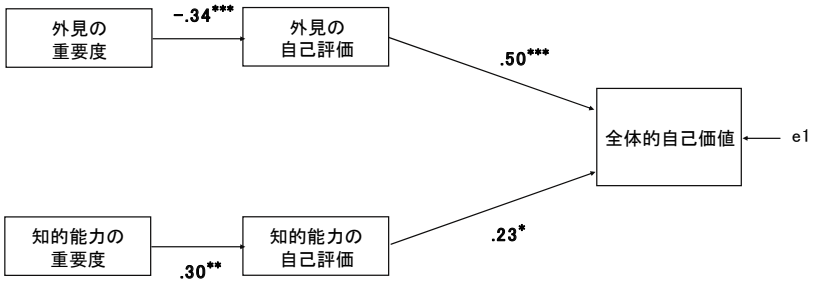
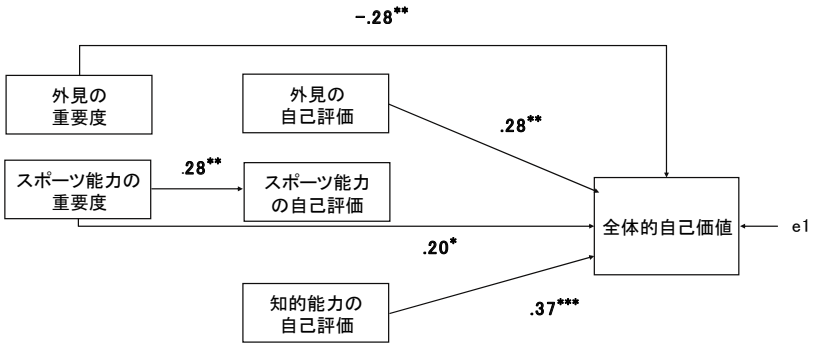


Fig.3　最終的なモデルの推定結果（2年男子）



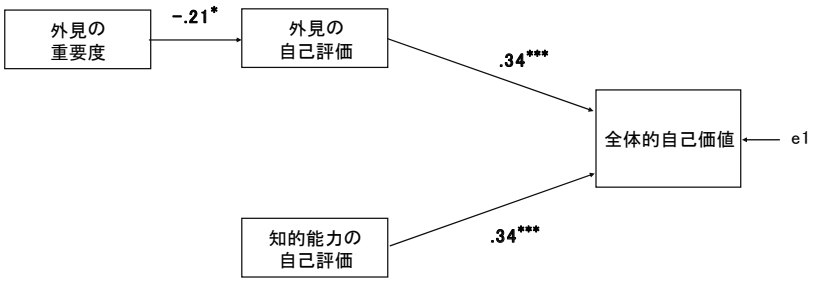
・図中の値は標準化係数である。
・誤差変数，全体的自己価値へのパスがみられない変数は省略した。
***:p<.001，*:p<.05

Fig.4　最終的なモデルの推定結果（2年女子）



・図中の値は標準化係数である。
・誤差変数，全体的自己価値へのパスがみられない変数は省略した。
***:p<.001，**:p<.01

Fig.5　最終的なモデルの推定結果（3年男子）



・図中の値は標準化係数である。
・誤差変数，全体的自己価値へのパスがみられない変数は省略した。
***:p<.001，**:p<.01

Fig.6　最終的なモデルの推定結果（3年女子）

５．まとめ

本研究の目的は，全体的自己価値，具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度から大学生の自己の様相を捉えることであった．

全体的自己価値については，男子と比較して女子は否定的に評価している．この傾向は，中学生や高校生と同様である（山本ら，2007[9]，2008[5]）．具体的側面の自己評価は，外見の自己評価では，１，２年生の時にはみられた性差が３年生ではみられなくなっている．これは初期青年期から女子は自分の外見をかなり否定的評価していたのが，年齢の上昇とともにあまり否定的に評価しなくなるからであると思われる．スポーツ能力の自己評価では女子の方が否定的に評価しているが，知的能力については男女ともが否定的に評価しているようである．また重要度については，男女ともどの学年もすべての側面が自分にとって重要であると評価していた．

全体的自己価値と具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度の関連については，「身体的外見の自己評価」と「知的能力の自己評価」は，男女ともいずれの学年においても，全体的自己価値に最も関連していた．外見の自己評価が関連している点では，中学生・高校生と同様であった．

１年男子と全学年の女子で，外見の重要度が外見の自己評価にネガティブに影響しており，外見を重要視しているほど否定的な自己評価をもち，外見を重視していることは自己の肯定さにはつながらないようである．一方で，スポーツ能力では，重要度が自己評価にポジティブに影響しており，スポーツ能力を重視している学生はスポーツに自信をもっている．スポーツ能力に自信をもっていない学生は次第にスポーツ能力を重視しなくなり，他のより自信をもった側面を重視し，自己を支える基盤としていることが考えられる．

男女での相違をみてみると，男子は「スポーツ能力の自己評価」が全体的自己価値に影響するに対して，女子は影響していない．男子とってはスポーツ能力が自己の肯定感につながるようである．

学年での違いをみてみると，男子では１，２年生の時は全体的自己価値に影響していた「スポーツ能力の自己評価」が３年生では影響しなくなる．一方で，男女とも「知的能力」の自己評価が全体的自己価値に影響する割合が高くなるようである．青年初期や中期にあたる中学生や高校生では，知的能力の自己評価についてそれほど強い関連がみられていない．しかし青年後期にあたる大学生では，知的能力を肯定的に評価することが自己の肯定感を支える１つの要素となっているようである．

【文献】

1）Harter,S. Identity and self development. In S.Feldman and G.Elliott（Eds.）. At the threshold: the developing adolescent. Cambridge: Harvard University Press. Pp.352-387（1990）.

2）O’Malley,P.M. & Bachman,J.G. Self-esteem: Change and stability between ages 13 to 23, Developmental Psychology, 19, 257-268（1983）.

3）Rosenberg, M. self-concept from middle childhood through adolescence. In j.Suls, & A.G. Greenwald（Eds.）, Psychological perspectives on the self, vol3.（pp.107-136）Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates（1986）.

4）Yamamoto Chika，Ujiie Tatsuo, Ninomiya Katsumi, Igarashi Atsushi, & Inoue Hiromitsu. Longitudinal development of global self-worth and self-evaluations during early adolescence in Japan, The Society for Research on Adolescence Biennial Meeting（2006）.

5）山本ちか　高校生の全体的自己価値の検討　名古屋文理大学紀要第9号，29-36（2009）.

6）Harter,S. The Self-Perception Profile for Adolescents. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO（1988）.

7）Harter,S. The construction of the self, New York, NY: Guilford press（1999）.

8）DuBois,D.L., Felner,R.D., Brand,S., Phillips,R.S.C., & Lease,A.M. Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. Journal of Research on Adolescence, 6, 543-579（1996）.

9）山本ちか・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光中学生の社会的行動についての研究（49）－具体的側面の自己評価および具体的側面の重要度が全体的自己価値に与える影響－　日本心理学会第71回大会発表論文集，1101（2007）.

10）Rosenberg,M. Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ; Princeton University Press（1965）.

11）山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 , 30, 64-69（1982）.

【付記】

本調査の実施にあたり，調査にご協力いただきました大学生の皆さんに心より感謝いたします。